

顧客、地域社会、スタッフ、すべてを幸せに！

ニューパートナーズ ホールディングスの **想い**

業界内のパイオニアとして、地域社会の福祉を活性化させたい。

その思いがあるからこそ、スタッフの皆さんにも経営理念を理解してほしい。

山中社長自ら、「顧客-地域社会-社員」、そして「深化するホスピス」について、ご自身の経験を元にお伝えします。



代表取締役 CEO

やま なか しん いち

山中 慎一

「顧客-地域社会-社員」を経営理念に掲げる背景

医療的ケアを必要とする高齢者の受け皿になりたい

創刊号でも話したとおり、私が福祉業界で起業したのは「社会のため、地域のため、困っている方々のため」という思いが原点にあったからです。日本では、自宅での生活に限界を感じる高齢者が年々増えています。また、医療行為を必要とする方の受け皿が十分でないという問題も顕在化してきました。自宅でも施設でもケアができない人たちは、病院を転々とするうちに、運動機能や認知機能を失ってしまうのです。

こうした現状を目の当たりにした私は、「幅広いニーズに対応できる老人ホームを作らなければ、真に地域社会の問題を解決することはできない」という考えに至りました。そこで、行き場のない重篤な方も積極的に受け入れられる、医療色の強い施設を目指して開業。約140名の看護師は全員が正看護師で、全国でも珍しい24時間体制のケアを提供しています。



顧客、地域社会、社員、それぞれへの思い

常に自分たちのレベルに見合った
最大限のサービスを提供できる施設を目指す

顧客

2023年現在、日本の全人口のおよそ29%が高齢者です。2040年には40%になると言われています。しかし、例えば奈良県橿原市(かしはらし)では、24時間看護師が常駐している老人ホームは約20棟中1棟のみ。このままでは、重篤者の受け皿が不足します。こうした状況下で、私たちが永続的に幅広いニーズの入居者様に対応するには、施設側のキャパシティを十分に考慮した、無理のない運営が不可欠です。「医療行為を必要とする方々を助けたい」という思いが先行し、人員や個々のスキルを無視して入居者様を受け入れては、現場に負荷がかかってしまいます。そのせいで思わぬ事故が起きたり、離職に繋がったりする可能性もあります。私自身、22歳から現場を経験してきたなかで、実際にそういった事態も見てきました。



地域社会

まずは病院の相談員などへの認知度を上げ、入居希望の方と繋げていただくネットワークを確率する必要があります。また、業界全体に対しては、新しい風を吹き込ませる異端児として、他社が追随したくなるような魅力的なビジネスモデルを示していくことが目標です。施設の内覧会に、有名なYouTuberや「職業、イケメン。オーディション」の優勝者を呼ぶのも、業界特有のネガティブなイメージを払拭する狙いがあります。

社員

私が考える経営サイドの役割は、スタッフ一人ひとりのレベルを十分に把握し、適材適所の人員配置に努め、現場と足並みを揃えて施設を運営していくこと。その土台があるからこそ、入居者様への万全なサポート、地域社会への貢献、働きやすい職場環境づくりができるのです。スタッフの皆さんが、1人でも多く私の思いに共感し、様々な課題を自分たちで見つけながら解決に向けて挑戦し続けてほしいと願っています。



「深化するホスピス」の重要性を実感したあの頃

祖父母を救えなかった悲しみが企業の原動力に

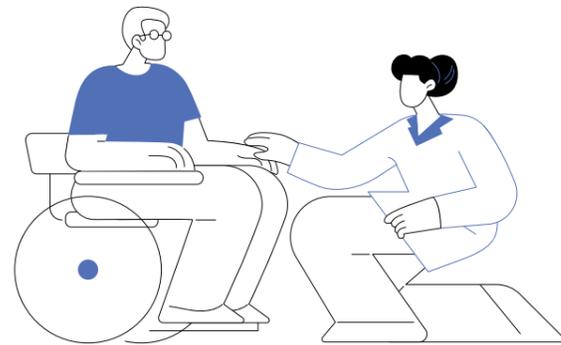
私の祖父母は、色々な病院で検査など受けている間に認知症が進行しました。26～27歳の頃、孫として認識されない悲しみのなかで2人を見送った経験から、同じ境遇の人を助けたいと、看護体制の整った老人ホームを立ち上げました。

今後は、「介護」や「ホスピス」の定義も変わっていくでしょう。当社としては、常に入居者様の考えに深く寄り添う「入居者様ファースト」の姿勢で極めていきたいと考えています。

スタッフにはこうあってほしい

入居者様を家族としてケアする姿勢が、ベストな選択肢を見つけるヒントになる

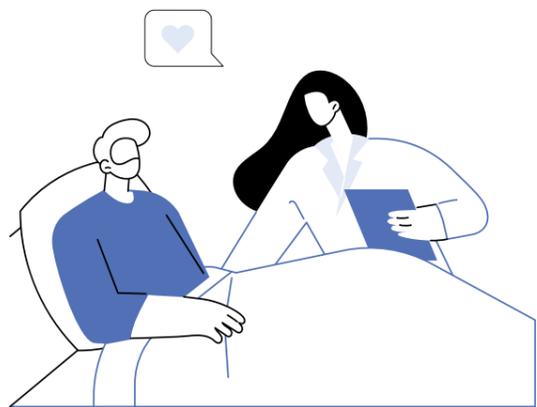
皆さんには、常に入居者様の立場になって考えることを習慣づけてほしいと思います。「どうしてもらったら嬉しいだろうか」という視点から、アイデアや工夫が生まれます。100点満点の答えを出すのは難しいかもしれませんが、その場その場でベストの選択肢を見つけてください。



そのためには！

日頃から最先端の情報に触れ、興味を持ち、挑戦する勇氣を持つことが大切です。新しいことを始めたり改善を試みたりするのは、一時的に効率が悪くなることもありますが、長い目で見れば確実に良い方向に向かいます。

最後に、入居者様との理想の関係についてもお伝えしておきます。私自身は、常に入居者様を自分の家族や身内だと思って接してきました。「笑顔で挨拶」「元気よく対応」といった、スタッフとしての心がけというよりも、その前段階で家族と捉えていたのです。そうしてきたからこそ、温かい言葉を返され、仕事を通して癒やされることができたのだと思っています。老人ホームは、人と人が最後に心を通わせる場です。皆さんにも、このような気持ちで臨んでほしいと願っています。



「あなたで良かった」と言われる介護を目指して

副主任が語る、介護福祉士としての経営理念と実践。敬意を持って入居者様の「最後のお家」での生活をサポートし、「入って良かった」と感じていただくことを目指すための経験と挑戦。常に笑顔を保つために絶えず自己戒めを続けるその理由に迫ります。ぜひ、その真摯な思いに触れてみてください。



かなざわしのぶ
金澤志信さん

「経営理念」でここを大切にしています！

共に過ごさせていただく時間をより良いものに

副主任として現場で入居者様と関わる中で、最も意識している理念は「入って良かった」と思っていたことです。入居者様の中には、私たちと過ごすこの場所が最後のお家になる方もいらっしゃいます。大切なお時間を一緒に過ごさせてもらい、関わらせてもらっていることに敬意を持ち、介護をしているというよりも、最後のお手伝いをさせていただいているのだと感じています。「入って良かった。ここでなら人生を終えてもいい」と思っていたようなお手伝いをできればという想いで働いています。

大切にすることで良かったこと

「あなたで良かったわ」「金澤さんが来てくれたんだ」と介護士の1人としてではなく、私で良かったと言ってもらえたときはやりがいも感じますし、経営理念を心がけてきて良かったなと思います。



きっかけをくれたエピソード

入居者様に気を使わせてしまっていた過去の自分

私は父が50歳のときに生まれました。いつかは「父の手伝いをしたい、手に職もつけたい」と福祉専門の高校を卒業し、介護福祉士資格を取得。実際に仕事として、たくさんの方と出会う中で、それぞれの生きてきた人生や生活背景を知り、入居者様にとって“大切な時間”と一緒に過ごしていると強く感じるようになりました。しかし、いつも前向きに働いていたわけではありません。夜勤でナースコールが頻回だったときはしんどいと思うときもありました。それを顔に出してしまっていたことも。あるとき、何回も呼ぶ方がいて、その方がふとした瞬間に言った冗談に思わず笑ってしまいました。すると、「やっと笑った顔が見られたわ」と喜んでくださいました。その言葉を聞いて、どれだけ自分がしんどくても、困っている入居者様に前にしんどい表情を見せてはいけないと自分自身を戒めました。それがきっかけとなり、入居者様の前では常に笑顔で柔らかくいることを心がけ、安心していただけるような関わりを持つ部分を気をつけるようになりました。

スタッフの皆さんへのアドバイス

淡々と作業のようにしてはいけない

職歴や経験に関係なく、“入居者様ファースト”で自分ができることを一生懸命やるのが良いケアに繋がっていくと思います。プロフェッショナルでありながらも、人として関わろうとする姿に入居者様も信頼を抱いてくれると感じます。この仕事は「仕事を素早くこなす」ということよりも、「目の前の人にどれだけ向き合うか」ということが大切なのではないでしょうか。

入居者様へのメッセージ

私の人生の2倍も、3倍も生きてきた皆さんからいつも色々なことを勉強させてもらっています。元気をもらい、頑張るパワーをもらっていることに感謝しています。

